

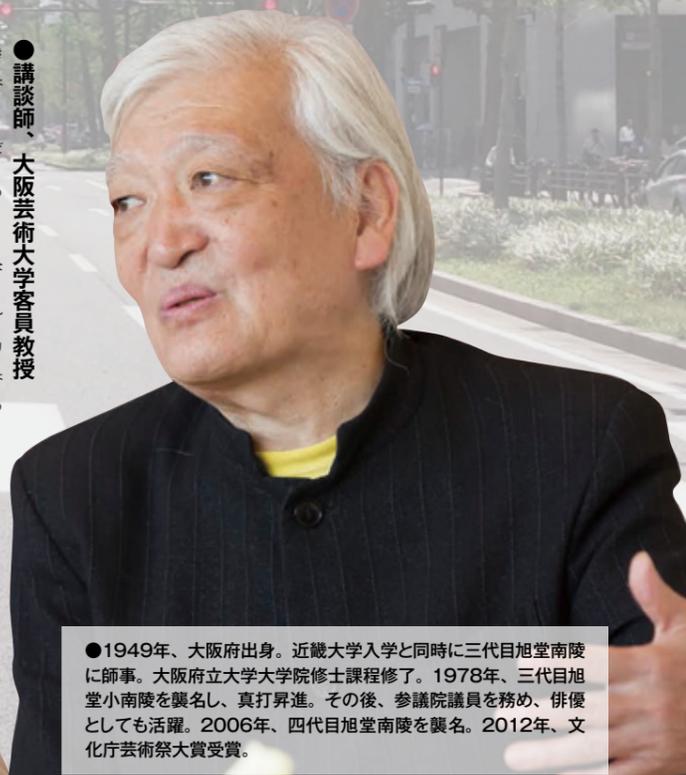
関西を愛する関西人による

「関西」喝^{かつ}性化対談

関西の将来のために何を知り、何をすべきか
 関西の歴史と文化からまちづくりを考える

関西の地盤沈下が叫ばれて久しい。「関西活性化」や「元気な関西」をテーマに様々なシンポジウムやセミナーが開かれているが、画一的で紋切り型の議論も多い。

今回は関西について多様な提言を発信し続けるお二人に関西を語りつくして頂いた。関西人にとって耳の痛い発言もあるが、関西を愛するが故の叱咤激励と受けとめたい。さあ、今こそ関西人に「喝^{かつ}」！



● 講師、大阪芸術大学客員教授
旭堂 南陵氏

● 1949年、大阪府出身。近畿大学入学と同時に三代目旭堂南陵に師事。大阪府立大学大学院修士課程修了。1978年、三代目旭堂小南陵を襲名し、真打昇進。その後、参議院議員を務め、俳優としても活躍。2006年、四代目旭堂南陵を襲名。2012年、文化庁芸術祭大賞受賞。



● 国際日本文化研究センター教授
井上章一氏

● 1955年、京都府出身。京都大学工学部建築学科卒業、同大学院修士課程修了。京都大学人文科学研究所助手を経て現在、国際日本文化研究センター教授。著書は『霊柩車の誕生』『美人論』『関西人の正体』『現代の建築家』など多数。「京都ざらい」で2016年新書大賞受賞。

関西独自の価値観とは

井上 テレビのお笑い番組やバラエティ番組で、一見、関西が全国的になったように思われますが、実は、「関西らしさ」といわれているものは、「東京からみた関西観」が多いのではないのでしょうか。逆に、それに私たち関西人が合わせている、という状況では？ (笑)。

南陵 大阪のおばちゃんにはヒョウ柄の服を着ている、と言われます。しかし、大手広告代理店が、同じ人口規模の東京と大阪の駅の乗降客を調査したら、大阪より東京の方が「ヒョウ柄率」が高かったとか(笑)。

井上 関西の財界や行政は、しきりに関西経済の活性化、といっています。経済発展だけに価値を置くという発想自体が、そもそも東京的ではないかという気がします。

南陵 首都圏は、東京に一極集中してひたすら経済発展を追い求めています。それに対して関西は、大阪、京都、神戸、みんな自分を中心で一番エライと思っている(笑)。たとえば、ぼくは堺出身ですが、堺は歴史と文化の都市です。千利休やその師匠の武野紹鷗も堺出身ですし、妙國寺、



南宗寺などの古刹もたくさんあります。歴史的には京都よりも上という意識があります。京都が御所なら、こつちは仁徳天皇陵があるやないかと(笑)。

井上 これまで関西は首都圏と違い、京都は観光、神戸は貿易、大阪は商いなど、それぞれの都市が独自の歴史を活かして発展し、個性的な文化を発信してまちづくりを進めてきました。

南陵 最近の関西は、都市の格が落ちてきているように見えます。経済の格ではなく、「品格」がね。

井上 そうなんです。どこそこになげたくない、とにかく経済発展しなければならぬ、と、こだわっていると、品格を落としてでもいいから売上数字を上げようとする。

南陵 非効率的でも品格のあるまちづくり、関西はそういう価値観があってもいいと思いますね。

まちの魅力を取り戻すために必要なこと

南陵 私の小学校時代の教科書には、「大阪は水の都、煙の都」と書かれていました。いまでいうと、「煙」はスモッグ、公害ですけどね(笑)。昔は、それが繁栄の象徴でした。この「重厚長大産業」の偏重から転換ができたのが、こんにちの大阪の地盤沈下の原因かもしれません。その原因のひとつは、産官学の連携プレーがとれなかったからではないでしょうか。昔の大阪のおっちゃん、商人のせがれは算盤(そろばん)だけ学んでおけばええのやと、よく言っていました。適塾などの優れた学校の歴史を持ちながら、一方で一般に学問軽視の伝統が続いてきたのが残念ですね。

井上 19世紀に大阪を訪れたヨーロッパの人たちは、「まるでベネチアのような」と書いています。運河が人々の生活や水運を支え、美しい景観や文化も築いてきました。それが高度経済成長期に次々埋め立てられ、「水の都」と謳われた景色も失われてしまいました。いま大阪に来て、ベネチアのような、という人は一人もいないと

思います。私たちは、東京に遅れをとりたくないという過剰な競争心から、歴史や文化、景観の美しさなどという価値を見失っていたのかもしれない。

南陵 堺でも、歴史ある河川、土居川を一部埋め立てましたが、もういちど土居川をきれいにして、まちの魅力をとり戻そうという考え方も出てきています。韓国では仁川の例がありますね。このようなまちづくりの取り組みには、市民の理解と合意が必要ですね。どこかお手本にするような都市はありますか？

井上 私はヨーロッパに行くと、街並みが非常に美しいといつも感じします。ウィーン、ローマ、パリは、上海の発展に負けたくないなどとは全然



※1 適塾 蘭学者・医者として知られる緒方洪庵が江戸時代後期に大阪・船場を開いた蘭学の私塾。阪大医学部慶応義塾大学の源流のひとつとされている。
 ※2 仁川(インチョン) 韓国の港湾都市。再開発の象徴として清溪川(チンゲチン)復元事業に取り組み、緑豊かな都会の水路景観を生み出したことでも知られる。



思っています。ドバイやニューヨークと張り合おうなんて思っています。昔からの美しい街並みをそのまま保つように努力しています。ベネチアは400年前と比べて、街並みはほとんど変わっていません。発展しなければならぬという強迫観念に縛られていないんです。

と、大阪城に上つたりしている。近代的な建物から、数百年の伝統の美を残す建物へ、アジアを再発見しているような気がします。

行政の役割と市民の自覚がまちづくりの肝

南陵 関西人の気質として、いいものを残し、新しいものをつくっていくというメリハリができるような気がします。大阪城の横に高層建築があってもいいじゃないですか。それも大阪らしいと思う。それが新しい都市の魅力につながる。外国人が多く訪れるようになったのも、そのへんの魅力かなと思います。彼らはハルカスに上つたあ

井上 御堂筋の建築基準が緩和されましたが、ヨーロッパの厳しさからみれば、御堂筋や京都の規制は規制のうちに入りません。その一方で、アムステルダムもベネチアも、運河に手すりはありません。日本では、万一誰かが落ちたとき、誰が責任をとるんだということで、街並みの美観より安全を優先する。もちろん安全は重

井上 御堂筋の建築基準が緩和されましたが、ヨーロッパの厳しさからみれば、御堂筋や京都の規制は規制のうちに入りません。その一方で、アムステルダムもベネチアも、運河に手すりはありません。日本では、万一誰かが落ちたとき、誰が責任をとるんだということで、街並みの美観より安全を優先する。もちろん安全は重

井上 御堂筋の建築基準が緩和されましたが、ヨーロッパの厳しさからみれば、御堂筋や京都の規制は規制のうちに入りません。その一方で、アムステルダムもベネチアも、運河に手すりはありません。日本では、万一誰かが落ちたとき、誰が責任をとるんだということで、街並みの美観より安全を優先する。もちろん安全は重



IRイメージ図(提供:関西経済同友会[2015年1月発表])

ンバンドならバりに学びに行くのもいいかもしれません。もし、大阪の豊臣政権が続いていたら、日本も鎖国政策をとらず、いまごろ大阪は有数の国際都市になっていたかもしれません

井上 御堂筋の建築基準が緩和されましたが、ヨーロッパの厳しさからみれば、御堂筋や京都の規制は規制のうちに入りません。その一方で、アムステルダムもベネチアも、運河に手すりはありません。日本では、万一誰かが落ちたとき、誰が責任をとるんだということで、街並みの美観より安全を優先する。もちろん安全は重

(笑)。やはり260年間も国を閉ざしたことで、科学技術や学問の発達だけでなく、いろいろな面で世界に遅れをとりました。いまはまだ、その劣等感があるのかもしれない。IRの誘致によって外国からの観光客呼び寄せるといふのもひとつの選

井上 御堂筋の建築基準が緩和されましたが、ヨーロッパの厳しさからみれば、御堂筋や京都の規制は規制のうちに入りません。その一方で、アムステルダムもベネチアも、運河に手すりはありません。日本では、万一誰かが落ちたとき、誰が責任をとるんだということで、街並みの美観より安全を優先する。もちろん安全は重



“例え非効率的であっても、「品格のあるまちづくり」、そういう価値観があってもいい”

要ですが、あまりにも過保護になっている部分もあります。少々不便になっても、街の美観や安全は自分たちで守る、という市民の合意がヨーロッパの都市にはみられます。日本では難しいのでしょうか。

南陵 役所の人たちも、市民からの苦情が来たら対応しなければならぬのでしようが、少し行きすぎという気がすることもありますね。

井上 たとえば、「電車にお気をつけください」というアナウンスや、道路や川岸などの安全柵は、ヨーロッパの都市では見られません。アルプスで列車に乗っていると、山の斜面から小石が降ってきたりします。これは市民の自覚の差だと思えます。もちろん東南

術革新で活気づいていたからです。今回、とりあえず「関西活性化の起爆剤」として万博を誘致しようというのだしたら、それは本末転倒です。本当にいま関西が世界に誇れるもの、また世界に貢献できるものを紹介したい、という強い気概をもって、関西ならではの万博を実現したい。

井上 関西の特長として、民間の活力でまちをつくってきたという伝統があります。都市の格を上げるような歴史的建造物は、民間の力で支えてきました。そういう気運がいま失われています。

南陵 防災や治水にしても、大橋房太郎の淀川治水をはじめ、市民や民間が中央行政まで動かして推し進め

海・南海地震など大災害への備えは行政でしっかり進めてもらわなければなりません。身近な安全施策まですべて行政や鉄道会社、道路管理者任せにして、自分の身を自分で守る意識が薄れているのではないのでしょうか。

南陵 河川には非常時の水の確保という大事な働きもあるのに、阪神大震災の時、水洗トイレが使えないので川の水を飲んで流そうと思っても、安全柵のため川岸に下りられません。この教訓から、私は行政に働きかけて、川岸に下りられる河川整備を求めてきました。

井上 真の意味での市民本位のまちづくりには、行政には大きな視点で防災整備をしてもらい、地域の細かい部分は自分たちで注意し維持していこう、という市民の意識が必要だと思います。

民間の気概を甦らせ、真の関西活性化を！

南陵 いま関西はインバンドで盛り上がっています。IRや万博の誘致も話題になっていますね

井上 パリは100年前から世界中の観光客を相手にしてきました。イ



大橋 房太郎(提供:国土交通省淀川資料館)

てきました。姫島(現在の大阪市大正区)は昔、「勘助島」といわれ、中村勘助という人が再開発したんです。近年、関西が元気がないといわれるのも、なにごとくも行政任せにして民間の気概が薄れてきたことも原因のひとつです。民間の気概を取り戻さないとけません。インバンドを進めるために重要な「なにわ筋線」計画も民間の活力で早く進めていきたいものです。

井上 経済にせよ、まちづくりにせよ、「とにかくどこそこを負けるな」という発想でなく、「本当に関西のいい点を、われわれ市民の手で守り育てていこう」という市民の合意と決意が大切だと思います。

“ヨーロッパのまちは、発展しなければならないという強迫観念に縛られていないんです”

※3 インバンド 外国人の訪日旅行。
 ※4 IR 国際会議場、ホテル、商業施設などにカジノを併設した統合型リゾート。
 ※5 大橋房太郎 私財をなげうち淀川治水に取り組み、治水翁と呼ばれた明治時代の政治家。
 ※6 勘助島 1630年 中村勘助が木津川の川尻(大正区三軒家周辺)を治水したことに由来する。